



討論要旨（二〇二二年度シンポジウム「『歴史探究』を考える」報告要旨）

池田，拓哉

(Citation)

神戸大学史学年報, 39:17*-19*

(Issue Date)

2024-06

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100491667>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100491667>



二〇二二年度シンポジウム『歴史探究』を考える」報告要旨

討論要旨

以上、三名の報告終了後、史学研究会委員の和田帆香氏（日本史）を司会に質疑応答が行われた。

まずは、三名のそれぞれの報告に対する討論から行われた。

最初に合田氏の報告について、エーゲ文明やヒッタイトなどの古代文明の時系列を縦に並べる図式で明示する形で指導していることの意図を確認し、同文明を見る上で資料としての世界地図の重要性を指摘された。これに対して合田氏は、指摘の通り古代文明を見る上で時系列だけでなく、地図を使って空間的に見つめることも重要であると回答した。

続いて大橋氏の報告について、大橋氏が提唱している概念理解型の授業に関して、具体的な授業例を問いの出し方や対話の行い方などに焦点をあてて教えてほしいという質問がなされた。この質問に対して大橋氏は、心理学の側面から生徒がどう学ぶのかという点を重視する欧米とは異なり、日本の教育学は生徒の学びという点に弱

い部分を抱いており、氏としては彼らが効果的に概念を学ぶ方法を模索していると回答した。それを受けて、授業における問いと対話がいかにして展開するのかという質問がなされた。これについて氏は、授業中に生徒達の机を回りながら彼らと積極的に対話を行い、そこから生まれてくる自発的な問いを重視していると回答した。

続いて、全体を通した議論へと移った。

まず、大橋氏の報告について、歴史は暗記科目であるという考えを見直すべきであると改めて実感させられる一方で、歴史の概念を考える上で基礎となる知識が必要になる場面は存在しており、知識の必要性についてどう考えているのかという質問がなされた。これについて大橋氏は、指摘の通り概念を考える上である程度知識は必要であると回答した。

続いて吉武氏の報告について、歴史総合・地理総合と日本史・世界史探究科目の内容を互に関連させながら授業を行っているのかという質問がなされ、さらに合田氏の報告については、テストの評価は教員自身で完結せずに客観的な評価が重要になるかと思うが、それについてはどう考えているのかという質問もなされた。これに対して吉武氏は、勤務校の都合で自身が歴史総合・地理総合を担当する機会はないが、もし総合科目で教員の一

一人一人の特徴を活かして一つの分野に集中させることが出来るのなら、日本史・世界史探求でそれを使い発展させることが出来るのではないかと回答した。また合田氏は、テストの評価に関して、学習指導要領に則りつつも最終的には教員の裁量になるので、職員会議で互いに質問などを出し合うなどして客観性や柔軟性を担保する試みは行っており、公平性には細心の注意を払っていると回答した。

続いて生徒に歴史の概念を理解してもらう上で、どのようなテストを作成しているのか、報告者達の取り組みを聞かせてほしいという質問が出された。これに対して大橋氏は、大学入試や欧米のバカロレアの評価などを参考にしつつテストを作成しているが、それを行う上で教科書の記述を意識的に概念化することが重要であると回答した。

また大橋氏の報告に関して、概念を重視する歴史教育は必要とする知識量が増加し、大学受験の歴史教科がこれまで以上に暗記科目としての性格を強めるのではないかと懸念があり、これに対する見通しを報告者から伺いたいという質問があった。これについて大橋氏は、大学によってはすでに概念を問う問題を出題しているところもあるが、指摘の通り多くの知識を必要とする問題

を出すのはあまり現実的ではないかもしれないと回答した。さらに吉武氏は概念を問う上で最低限の知識を身につけることが、大学受験においても重要なのではないかと回答した。続いて合田氏は、近年の大学共通テストではある程度の知識量で解答できる史料読解の問題も存在しており、必ずしも多くの知識が無くとも概念を把握していれば一問一答形式の問題でなくとも対応できるのではないかと回答した。

最後に歴史科目の大学受験指導について、大学共通テストにおける探究科目の思考問題は、かなり複雑な出題形式となっており、この対策を指導するにあたってどうようにして類似問題を作成したらよいか質問がなされた。これに対して大橋氏は、指摘されたような問題を作成するにあたって、普段から資料集の研究を行い、出題できそうな史料を把握することが重要であると回答した。また吉武氏は、常に史料読解や研究書を読むなど、歴史研究を継続して行うことが問題を作成するのに重要な要素であると回答した。合田氏は、吉武氏が指摘する通り教材研究を行うことが大切であり、教員は教育指導要領にある歴史的な物事だけでなく、その背景までしっかりと把握する必要があると回答した。さらに大橋氏は歴史科目の問題を作成する上で、学術論文で用いられる問題

設定などの論理展開が役に立つと補足した。

最後に司会から、今回の討論は教育現場における探究科目の課題などに関する質疑応答が多い印象を受けたが、大学教育ができることはないのかという質問がなされた。これについて大橋氏は、旧課程の歴史教育では高校と大学の教育はほとんど接点がなかったが、世の中が変化する中で現在は両者が互いに補い合う必要があり、概念化を軸とした指導がそれに役立つのではないのかと回答した。さらに合田氏は、現在に至るまでの研究者の成果をまとめた教科書を理解することが歴史教育において重要な要素となっているが、高校教育の現場においても大学教育と同様に史料を読解し歴史像を構築することが求められているのではないかと回答して、質疑討論は終了した。

(文責…池田拓哉)